
奇妙な一週間。

CACAONOVEL12

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇妙な一週間。

【Nコード】

N5592Z

【作者名】

CACAO NOVEL 12

【あらすじ】

主人公・佐伯 静枝とはある理由で突然死し、幽体離脱してしまう。

神だと名乗る人物に出会い、その人物から、

「お前はあと一週間以内にある事をやり遂げねば、そのまま死ぬ」と告げられる。

静枝はその役目を果たそうと懸命に努力する。

「だってまで死にたくないもん！」

その途中で、家族や友達の秘密・本当の気持ちを知ってしまう。

はたして、静枝は役目を果たせるのか？

短いですが、最後までお楽しみください。

こんにちは私

苦しい。

お父さんが私の名前を大声で呼んでいる。

お母さんは涙と鼻水で顔がぐしゃぐしゃ。

お兄ちゃんはお兄ちゃん「頑張れ」と叫んでいる。

お姉ちゃんの意味不明な言葉で私を呼んでいるようだ。

苦しい。

痛い。

私は痛みと苦しみの中、そのまま意識を失った。

気がついた。

私は病院のベッドに寝かされている。

寝ていたようだ。

と。

自己紹介がまだだった。

私の名前は「佐伯 静枝」

12才の小学6年生だ。

どういう訳か知らないが、私は病院のベッドの上で寝ている。

体が重い。

疲れているのかな？

重い体を起こして立ち上がった。

この部屋は個室のようだ。

看護師さんが入ってきた。

「あ、あの・・・」

小さい声ではあったが、この小さい部屋の中だ。

それに、この部屋には私と看護師さんしかない。

ところが、この看護師さんは私の事を無視した。
????

感じ悪いな。

舌打ちしたい気分ではあったが、ここは堪えておいた。

看護師さんは、しばらくドアの前で立っていた。

急に泣き出した。

え????

なんで泣いてんの？

私はベッドの反対側の隅っこにいた。

看護師さんは、私に気づかないのか、そのままベッドに向かって歩きだした。

ベッドに向かったということは。

私がベッドで寝ていた事は知っていた。

看護師さんだし。

私は病気が事故で入院しているのか？

私は改めて、自分の寝ていたベッドを見つめた。

すると、ある衝撃的な事実が判明した。

私の寝てたベッドに、

誰かが寝ている。

看護師さんは、その誰かの顔を見つめていた。

誰なんだろう？

知りたい。

もしかしたら、シヨタコンでロリコンの変態かも。

そうだとしたら、許せない。

でも、上に寝ていたのは私。

て事は、間違えてその誰かの上に寝ていた私の方が悪いということになる。

そんなの恥ずかしくて言えない。

看護師さんは、しばらくその人の顔を見ていた。

そして、急にその人の腕から点滴を外した。

さっきは気付かなかったが、この人はたくさん点滴をしていたようだ。

看護師さんは、その一つ一つを丁寧に外していった。

ゆっくり、ゆっくりと。

私はその誰かの細い腕を見て、確信した。

大人じゃない。

大人の女にしては細すぎる。

見た目からして男ではない。

とすると。

小学生の女の子と思うべきか。

点滴を外し終えた頃、看護師さんの目から涙がドバッと溢れた。

「どうしたんですか？」

と、声を掛けた見たものの。

看護師さんはガン無視。

本当に感じ悪い。

ガラッ。

またドアが開いた。

今度入ってきたのは先生と・・・。

「え？」

お父さん、お母さん、お兄ちゃんに、お姉ちゃんまで。

「みんな？なんでここにいるの？」

私の胸では疑問が殺到していた。

なんと！

家族までもがガン無視。

みんな、目が真っ赤に腫れ上がっている。

頬と唇が震えている。

「ねえ、どうしたの？」

お父さんに触れてみた。

でも、触れる前にスルーされた。
なんで？

みんな、私という存在を無視している。
先生が急に口を開いた。

「誠に申し訳ありません。

我々も最善を尽くしましたが・・・。

手遅れでした。

娘さんは、御亡くなりになられました」

娘？

亡くなった？

「本人は今日の午前6時に亡くなっておりました。

その為、点滴を外させていただきました」

それで・・・。

看護師さん、死んだ人の点滴外すの辛かったろうな。

でも・・・。

アレ？

私、死んだ人の上で寝てたの？

考えただけで背筋がぞぞおっとした。

てか娘って何？

私もお姉ちゃんも生きてるよ。

それに家、女はお母さんとお姉ちゃんと私。

この三人以外ってことは・・・。

隠し子？！

てか、なんでみんな驚かないの？！

初めて知った新事実には興奮した。

私の妹がお姉ちゃんに当たるはず！

私はみんなの目を無視して隠し子（？）の顔を見た。

心臓が止まるかと思った。

ベッドで寝ていたのは、隠し子なんかじゃない。

私
だ
っ
た。

はじめまして神

??????

なんで私が死んでんの？

ん？？

もしかたら私って・・・。

アレかな？

ほら、あの・・・。

お笑い芸人の双子のギャグの

「ユウタイリダツ」

ってヤツ。

そっか・・・。

私って天才かも！

私、なんやかんやで死んじゃって、それからなんやかんやで幽体離脱したんだ。

でも・・・なんで？

「ようやく気が付いたようだな」

変な囁れた声が聞こえた。

後ろを振り返ってみた。

そこには。

巨大なオッサンが立っていた。

髪は真っ白で、髭も同様。

あとふっとい眉毛も。

服はギリシャ神話の人の服・・・。

簡単に言えば、「走れメロス」の服の長いバージョン。
で。

そのオッサンは威厳たっぷりに言った。

「儂は神だ」

「へえ」

変なオッサンは片方の眉をピクリと動かした。

「驚かんのか？」

「オッサンさ、その変なコスプレ早く脱いだほうがいいよ」

私は即答した。

「オッサンではない！

もういいわい！」

ぷいっとそっぽを向いた。

あーあ……。

しゃーない……。

私はポケットを探ってアレを出した。

「くちやくちや」

「？」

オッサン……ええい！

神は私のくちやくちや音と鰻の臭い匂いに反応した。

「それはなんじゃ？」

「鰻。」

おいしー！！」

私は嫌味たつぷりに言った。

「くれ」

「じゃ、私のお願い聞いて」

「………分かった」

あっさり承諾。

ちよろい。

「はい」

私は約束通りに鰻を渡した。

神は頷きながら、豪快に一口でパクリと口に入れた。

バリっ。ボリっ。

鈍い音が聞こえた。

「うむ……。」

それでは聞こうではないか」

「私、なんでこうなってるの？」

「うむ。」

それはだな・・・」

ゴクリ。

「今は言えん」

「ええ」

「まあ今度言おう。」

それより貴様には、重大な使命がある」

「重大な使命？」

「うむ。」

ある5つのものを探して欲しい」

「ある5つのもの？」

私は聞き返さずにはいられなかった。

「それはじゃな。」

1つは愛する者の為に書かれたもの。

2つは幸せにする為に歌われたもの。

3つは癒す為に送られたもの。

4つは伝える為に残されたもの。

5つは仲直りの為に作られたもの」

なんか凄い。

「これを見つけさえすれば、貴様は生き返ることができる」

「ええ?!」

亦、ほんと？」

「無論じゃ。」

その頭の輪を見る」

私は言われるがままに自分の頭の上を見た。

黄色い輪がピカピカしてた。

「ねえ、これって・・・」

「うむ。」

死者の輪じゃ」

えゝ？

天使の輪じゃないの？

「それが貴様のタイムリミットを示す」

「タ、タイムリミット？」

「うむ。」

その輪はまっ黄色であろう？

その輪がくすめばくすむほど、貴様のタイムリミットが迫っているということじゃ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「1週間以内に5つのものを探さねば、貴様はそのまま死ぬ」

「は？嘘お」

「ホントじゃ。」

それよりほれ、急がんと時間が無くなるぞ」

「ええ?!」

「それではさらばじゃ」

「ちよつと・・・待って!」

神は消えていった。

「嘘・・・」

私にはやるべきことがある。

私は決意した。

このまま死ぬわけにはいかない。

探しましょう輪

このまま死ぬわけにはいかない。

「そのいきそのいき」

妙に甲高い声が頭からした。

よく見ると・・・。

「よっす！

オイラは輪！よろしく！」

輪に目が付いてる。

「???!!」

「まあまあ。

そう驚かないで」

驚くだろ。

普通。

「これからはオイラが静枝をナビゲートするよ」

いきなり呼び捨て。

・・・ナビゲート？

「どういうこと？」

「うん。

静枝、これからは5つのものに近づいたらオイラがピカピカ光る

よ！」

「ホント？」

「ホント」

ふん。

ま、役に立つみたいだしいつか。

「早速だけど、反応してるよ」

「ええ?! 嘘!」

「ほんとほんと。」

「すぐ近く！」

私は辺りを見渡した。
で。

お姉ちゃんを見たとき、輪がピカピカ光った。

「ホントだ」

「でしょ」

輪は誇らしげに言った。

まじ凄い。

てかお姉ちゃん？！

何かあったの？

「静枝のお姉ちゃん、美人だね」

「そ、そう？」

ま、確かに。

家のお姉ちゃんは結構モテてたし。

「ん・・・？」

「どした？輪」

輪はマジマジとお姉ちゃんのお腹を見つめた。

「ああーーーーー！！！」

「え？なに？」

輪は急に叫んだ。

「静枝のお姉ちゃん・・・。」

美波は妊娠してるーーーー！！」

お姉ちゃんまで呼び捨て・・・。

つて。

えーーーーー！！！！

に、妊娠？！

「な、なんでわかんのか？」

「だって、オイラは生きている人も、死んでいる人も見分けられるんだよ。」

そしたら、美波のお腹にもう1つの命が宿っているのが分かった

んだ」

な、なんか凄い・・・。

そういえば、お姉ちゃん最近体調悪そうだった。

「これはきつと、5つめの仲直りの為に作られたものだー」
いきなり発見？

ラッキーなんだけど・・・。

「お姉ちゃん、私にそんな事言ってくれなかったよ」

「そうなの？」

輪は意外そうな声を出した。

「知らなかった・・・」

なんか悲しい。

同じ家で暮らしてるのに・・・。

「・・・・・・」

「静枝、大丈夫？」

「・・・うん。」

ありがと・・・」

受け入れなくちゃ。

死んだ事もちゃんと受け入れられたんだから。

「それより、これからどうすんの？」

「とりあえず、美波についていこう」

「う、うん」

なんか尾行？ ストーカーみたい。

「仲直りの為ってことは、お姉ちゃん誰かと喧嘩してたって事だよ
ね？」

「そうだと思う」

「じゃあ、その原因を探って、仲直りの為に作られたものを探せば
いいの？」

「そうなるね」

「作られたものって・・・。

赤ちゃん？」

「それは違うよ」

即答された。

私はムツとしながら、

「なんでそう言い切れるの？」

「赤ちゃんって命があるんだよ？」

オイラ達が探しているのはもの！

命じゃなくてももの！」

輪に説教された。

ほんと生意気。

輪のくせに。

「とりあえず、美波を見張ろう」

「分かった」

私は不安だった。

これからどんな事があるんだろう。

全てを受け入れることができるかな？

でも。

受け入れなければいけないんだ。

決めたんだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5592z/>

奇妙な一週間。

2011年12月21日22時45分発行